MEIJO Q&A 15

人間学部 人間学科

Q 最近マスクをつけている人が多い気がしますが…。

Look

「風邪や花粉症、マスクをする理由はそれだけじゃない」

社会学の立場から人間関係の悩みを解決したい。

コミュニケーションや人間関係は難しいと感じる人が、現代社会には少なくないと思います。例えば、風邪でも花粉症でもないのに、顔を隠すためにマスクをする「だてマスク」の人をよく見かけるのもそのためではないでしょうか。接客のアルバイトをしていたある学生が、こんな話をしてくれたことがあります。「どんなお客様にも笑顔が求められる接客業。でも今日はそんな気分になれないからマスクを着けよう……」。つまり、自尊心を危うくする笑顔という仮面から自分を守るための別の仮面、それがだてマスクだというわけです（もちろん、だてマスクにはほかにもさまざまな意味があると思いますが）。それにしても、こんなにもコミュニケーションや人間関係が難しく感じられる社会はなぜできあがったのでしょうか。そして、こうした困難にはどのように対処することができるのでしょうか。こうした点を社会学の立場から考えるのが、私の研究です。

世の中の当たり前を疑ってみよう。

買い物のときや飲食店などで、接客が丁寧すぎると感じたことはありませんか。私は「ここまで丁寧にされるとかえってこちらは居心地が悪い」と感じるようなことがよくあります。「できるだけ丁寧にしておけば間違いなかろう！」という、ある種の予防線的な措置が広がっているということだと思いますが、これも人間関係が困難になっていることの現れかもしれません。しかし、こうした過剰な丁寧さは、かえって人間関係を面倒にする原因になっているようにも感じます。社会学は、「当たり前」を疑う学問。世の中の当たり前を疑うことを通して、私たちの社会生活の中で生じているさまざまな問題に対して、「意外な答え」を提示できることが、社会学の面白さであり、意義だと思います。

PROFILE

櫻井 龍彦 先生

「面白くて役に立つ研究をめざしています」と言う櫻井先生。「私が思うに、面白いとは、“意外だけれど確かにもっともだ”と感じられ、役に立つとは、“それで誰かが救われる”ということだと思います」。

私の学生時代

一番面白くて救いでもあった社会学。

社会学の研究者を志したのは、人間関係や自己のあり方をめぐる問題に対して、社会学が一番面白い答えを提示してくれるように感じたからです。写真は、さまざまな社会学者の中でも、学生時代の私に特に多くの示唆を与えてくれたE.ゴッフマンの著書です。